

Japanese Utility Model Laid-open Publication No. HEI 3-128396

U

Publication date : December 24, 1991

Applicant : Nihon Denshin Denwa K.K.

5 Title : HEADPHONE

2. Scope of Claims for Utility Model Registration

(1) A headphone for reproducing a sound field intended for a person, wherein more than two loud speakers are disposed 10 in the vicinity of each of ears.

4. BRIEF DESCRIPTION OF DRAWING

Fig. 1 shows an example according to the present device.

Fig. 2 shows another example according to the present device.

15 Fig. 3 shows a conventional binaural system. Fig. 4 shows a conventional plural channel reproducing method.

FIG. 1

11: SOUND SOURCE

20 15: LISTENER

17: POSITION WHERE A LISTENER IS SUPPOSED TO LISTEN

19: POSITION WHERE THE LISTENER SENSES EXISTENCE OF MUSIC

21a: HEADPHONE

22: LOUD SPEAKER

FIG. 2

22h: LOUD SPEAKER FOR HIGH TONE RANGE

22l: LOUD SPEAKER FOR LOW TONE RANGE

5 FIG. 3

11: SOUND SOURCE

13: DUMMY HEAD

15: LISTENER

16: HEADPHONE

10

公開実用平成3-128396

② 日本国特許庁 (JP) ① 実用新案出願公開

④ 公開審用新案公報 (U) 平3-128396

◎公開 平成3年(1991)12月25日

審査請求 未審求 審査項の数 1 (全頁)

「考案の名跡」 ヘンドボン

英語題庫二—33248

日本語の文法と構造

会议内

四

卷之二

卷四

2. 美用新薬とその範囲

(1) 音源を再生し、個人を対象とする音場を再現するヘッドホンにおいて、各耳の近傍に2個以上の試聴器が配置されることを特徴とするヘッドホン。

3 番号の詳細が説明

卷之三

この考案は、主としてオーディオ再生や音声通信において、個人を対象に音場を再生するヘッドホンに関するものである。

「微波的技術」

卷之三

によつて遠隔地の音声を受聽する場合、あたかも受聽者が音源側の音場にいるのと同じ臨場感で音を聞くための個人を対象とする方法として、ヘッドホンを用いたバイノーラル方式が従来から提案されといふ。第3図にこのバイノーラル方式の原

1100

理を示す音源11がある室12内にミーヘッド13が配され、室12と異なる室14に居る受聽者15がヘッドポン16で音源11の再生音を聞く場合に、ミーヘッド13は受聽者15の頭部と同じ形状とされ、ミーヘッド13の両耳部分にマイクロポンを取り付け、そのマイクロポンで音源11の音を収音し、そのマイクロポンで収音した音をヘッドポン16で聞くことにより、受聽者15があたかもダミーヘッド13の位置における音源11の音場にいるのと同じ信号を両耳に得ようというものである。

ところがこの方法ではミーヘッド13が受聽者15の頭部を良く模擬していないと効果がでないことや、スピーカ再生の信号との整合性がないことが実用上の障害になっている。

別の考え方は多チャンネル再生法である。第4図にその多チャンネル再生法の原理を示す。この方法では音源11のある部屋12内で受聽者が受聽するであろう位置17を想定し、その位置17に音源11の音が到來する方向と同じ方向から受

聽者15に音が来るよう複数のスピーカ18を受聽者15の部屋14に配置するもので、受聽者15はあたかも音源11が同じ部屋14の位置19に存在するかのような実在感を得ることができ。つまり音源11と位置17との関係と、位置19と受聽者15との関係が同一となる。

この方法では受聽者15の位置や頭の角度を固定しないと効果が得られない問題があった。この考案の目的はオーディオ再生により音楽を観賞したり、通信によって遠隔地の音声を受聽する場合、あたかも受聽者が音源側の音場にいるのと同じ音場感で音を聞くことが、あらゆる受聽者に対して可能であり、かつ受聽位置や頭の角度を固定する必要がないヘッドポンを提供することにある。

「課題を解決するための手段」この考案は多チャンネル再生法の考え方方に基づき、人間は音の到來方向を感知しており、かつ方向の感知は耳介を含めた耳の近傍で行なっているとの観点から、各耳の近傍にそれぞれ2個以上の

拡声器を対応させたヘッドホンである。

「作 用」

この考案のヘッドホンによれば2つ以上の方針からそれぞれの耳に音波を放射することにより、実際の室内音場のように多くの方角から音波が到来する環境を受験者の近傍に創ることができ、従来のバイノーラル方式でのヘッドホンでは各耳に一つの拡声器を対応させるために音波の到来方向は1方向であった点が従来技術と異なる。また、従来の多チャンネル再生法では受験者の位置や頭の角度を固定しないと効果がでなかつた点が従来技術と異なる。

「実施例」

第1図はこの考案の実施例を示し、第4図と対応する部分に同一符号を付けてある。受験者15aの左右の耳にこの考案によるヘッドホン21a、21bが取付けられ、各ヘッドホン21a、21bにはそれぞれ2個以上の拡声器22が前後に配列されている。これら各拡声器22から各耳の孔に向う音の方向が、音源11のある部屋12内で

受験者が受験することを想定した位置17に音源11から到達する音の各方向とそれに対応するようになされてある。

このヘッドホン21a、21bにより音を再生すると、受験者15はあたかも音源11が同じ部屋14の位置19に存在するかのような実在感が得られる。これはあらゆる受験者に対しても同様に効果し、かつ受験位置や頭の角度を限定する必要がない。この実在感を得る点からは各耳に対し、3つ以上の拡声器を用いた方がよい。

拡声器の出力が小さい場合、耳介から少しでも離れて拡声器が存在すると特に低音域の音は減衰して聞こえにくくなる場合がある。低音域の到来方向が音源の実在感に及ぼす影響は高音域ほど頗るではないことが知られているから、拡声器の配列を高音域と低音域とに分けて配置して低音域の減衰の問題を解決することができる。

第2図に拡声器の配列を高音域と低音域とに分けて配置した場合の例を示す。左、右の耳に対し高音域用拡声器22hの頻度範囲を前後に配列し、

その配列の内側に各1個の低音域用拡声器22hを配置し、つまり高音域用拡声器22hより耳に近い位置に配置する。各到來方向別の音響信号は低音部分と高音部分とに分け、低音部分は到來方向別の信号を一つの信号に合成分成し、低音域用拡声器22hに入力する。高音部分は到來方向別に高音域用拡声器22hの対応するものに入力する。その効果として、拡声器の出力が小さくても、低音域の音量を損なわずに実在感のある音場を再現することができる。

「考案の効果」

以上説明したようにこの考案によれば、各耳の近傍に2個以上の拡声器を対応させることにより、2つ以上の方向からそれぞれの耳に音波を放射することにより、実際の室内音場のように多くの方角から音波が到來する環境を受聽者の近傍に創ることができ、受聽者はあたかも音源側の音場にいるのと同じ體感で音を聞くことが、受聽者の位置や頭の角度を固定しなくとも達成できるという利点が得られる。

4. 図面の簡単な説明

第1図はこの考案の実施例を示す図、第2図はこの考案の他の実施例を示す図、第3図は従来のバイノーラル方式を示す図、第4図は従来の多チャンネル再生法を示す図である。

実用新案登録出願人 日本電信電話株式会社
代理人 草野卓

図3

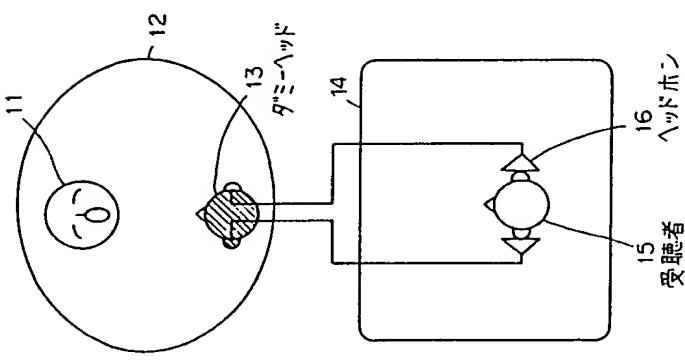


図4

